

接種で後遺症リスク半減 コロナワクチンで英研究「医療新世紀」

2021年10月19日(火)配信共同通信社

[新型コロナウイルス](#)はワクチン接種を終えた人でも感染することがある。英ロンドン大キングスカレッジのチームは、こうした「ブレークスルー感染」が起きても、2回の接種によって「コロナ後遺症」のリスクが半減するとの研究結果をまとめた。

英国でスマートフォンのアプリを使って集めた延べ220万人以上のデータを分析。接種者は感染しても症状が軽く、入院も少なかった。一方で全く無症状の人が多いため、感染に気づかずに動き回って人にうつしてしまう懸念がある。

チームは「ワクチン接種が広まっても、互いに距離を保って[マスク](#)をするなどの[感染対策](#)を続ける必要がありそうだ」と指摘する。

チームは2020年12月から21年7月にかけて、1回または2回のワクチン接種後に感染した人の症状を調査。1回接種者の0.5%、2回接種者の0.2%でコロナ感染が起きたが、せきや[くしゃみ](#)、[発熱](#)や味覚喪失などの程度は未接種者に比べて軽く、症状の種類も少なかった。ただ無症状の人が多いことも分かった。

なかなか回復せずに症状が長く残るケースは「ロングCOVID」とも呼ばれる。2回接種すると、4週間後も[後遺症](#)に悩まされるリスクは未接種の場合の0.5倍とかなり低くなった。ワクチン効果が裏付けられた形だ。

また、あまり裕福でない地域の住民や、高齢で心身が弱る「[フレイル](#)([虚弱](#))」状態の人は、ワクチン接種後の感染リスクが比較的高かった。チームはこうした人を対象とした「ブースター接種」などを検討するよう提案している。